

木造住宅の弱点 雨仕舞

一般社団法人住まいの屋根換気壁通気研究会

近年、断熱・気密性が高くエネルギー効率のよい家づくりとなってきましたが、エネルギー効率のことばかりに目を奪われて、肝心の耐久性がおろそかになっている住宅も、増加してきています。

従来の建て方であれば、外壁からの浸入雨水は、いずれかに排出されたのですが、現在の住宅はサランラップを巻いたような住宅になっているため、浸入した雨水が滞留し構造部材を腐朽させる要因になるケースも増えています。

昔のように、深い軒の出・切妻屋根・天井断熱・低気密低断熱住宅では起こらなかった劣化事象が、近年の、ゼロ軒・片流れ・キューブ型・屋根断熱・高气密高断熱住宅では起こりやすくなっています。

以下に劣化事象例を紹介します。

ゼロ軒住宅

現在増えているゼロ軒住宅一番のリスクは、屋根と壁と軒天の取り合い部や、換気・通気の入出口の雨仕舞いです。

ゼロ軒といっても、実際は軒の出が少し出ているケースが多く、このことがこの部位の

納まりを難しくしています。それでも、天井断熱であればまだよいのですが、ゼロ軒住宅と屋根断熱の組み合わせも増加しているため、適切な雨仕舞いと換気通気が取りにくいのです。

写真-1は、軒の出の少ない住宅の軒先です。この住宅は、軒の出130mmのため、雨仕舞施工の不具合が起こりやすく、屋根と軒天の取り合い部や軒天吸気口、壁と軒天の取り合い部に、台風や強風時に直接雨がかります。

また、この部位は、サイディング施工業者と屋根工事業者と大工の3職種の取り合い部にもあたり、3つの異職種が狭い範囲を施工するため、不備をきたすケースも多いのです。

写真-2は、職種と構造の取り合いのデメリットを低減させた納まりで、専用の換気部材(デネブアジャスト)を使うことにより、屋根の唐草板金と壁面を直接ジョイントでき、軒天の大工工事をなくし、工程管理のわずらわしさや軒天のコスト削減ならびに漏水リスクを少なくすることができます。

(次頁に続く)

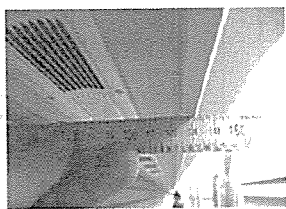


写真-1

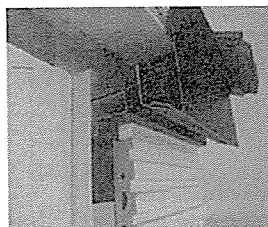


写真-2

ルーフバルコニー

写真-3は、内装クロスの継ぎ目の浮きやサイディングの白化が発生したケースです。

ルーフバルコニーの手すり壁天端が閉塞されていて、通気層内の熱気が行き場を失って、サイディングの変色やクロスの浮きにつながっています(図-1)。

手すり壁の天端は、裏張りサイディングで養生しており、防水の弱い裏面が雨水にさらされるため、吸湿して劣化しやすいのです。

その劣化しやすい裏張りサイディングを、釘やビスなどさまざまなファスナーで手すり壁天端に脳天打ちで留め付けるため、数年前に住宅金融支援機構で義務付けられた鞆掛シートの防水層を破壊し、劣化リスクを高めています。また、ファスナーの種類によっても漏水リスクの高低が指摘されています。さらに、手すりを支えるブラケットを脳天打



写真-3

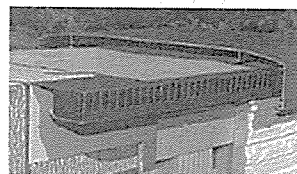


写真-4

ちでビス留めしているため、劣化リスクがより高くなります。

図-2は、その問題点を改善した納まりで、通気層の出口を確保するために、専用の笠木下換気部材(アンタレスミニ)を使った納まりです(写真-4)。この笠木下換気部材は、換気をしながら防水機能も有します。

これで、通気層内の熱気が重力換気によって、換気部材より放出され、夏型結露の原因を取り除くことができます。

また、この換気部材は横から釘で留めつけるため、危険箇所の手すり壁天端の鞆掛けシートの防水層を破壊せずに設置できます。

手すり壁天端には、余計な養生材がないため、笠木のかぶり方が深くなることによって漏水リスクを減少させることができ、養生材自体の劣化リスクもなくなります。

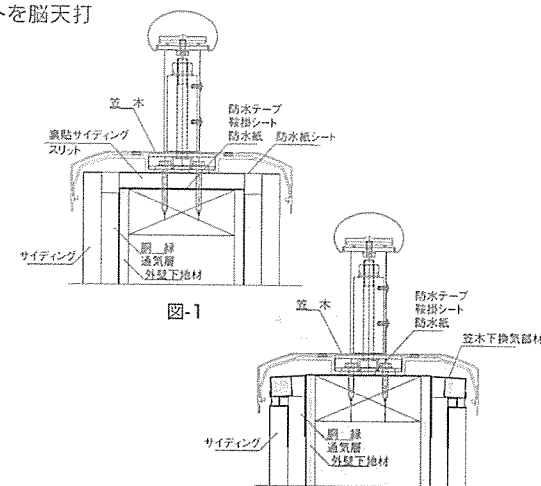


図-1

図-2

雨仕舞い・屋根換気・壁通気・室内換気・断熱・気密と、この6つの要素をトータルに考える必要性が高まっています。そのニーズに応えるため設計士・施工管理士等対象の外皮の雨仕舞い・屋根換気・壁通気の研究会「一般社団法人住まいの屋根換気壁通気研究会」を設立し、研究・開発に取り組んでいます。